

# 近代文学に描かれた女性像（その一）

——有島武郎の場合——

浅井 峯 治

## 一 はしがき

近代文学者の生涯を振り返って見ると、幾十年の昔に、二十幾才で世を去った人があり、その人の友達で、今も、なお、世に重きをなしている人もある。

もちろん、人かこの世に残した功績は、その人の在世の長さに比例するものではないけれど、文学者の生命を長く持ちつけている人を見ると、文学に敗北して、早く世を去った人たちの生涯か、いたましく振り返えられるのである。

ここに考えて見ようとすると有島武郎（一八七八—一九二三）の生いとも、決して長いとはいえず、彼とともに、雑誌『白樺』の同人であつた武者小路実篤（一八八五—）、志賀直哉（一八八三—）などの諸氏は、現存しているのに、有島は、今から四十二年前（一九二三年）、四十六才でこの世を去つてゐる。

しかも、堤田許一氏（一八九二—）か、「人間としての有島は、あの事件のために、ジ・オー・リズムに荒されたまま、今も不自然に局限された眼でしか見られない傾きがある。」（『小説有島武郎』

昭和十四年六月刊）といい、本多秋五氏（一九〇八—）が、「戦時下の方、有島全集は、もつとも古本値の安い全集となり、『白樺』派文学のなかでも、有島の作品は、死んだ継子同然にみなされている。」（『『白樺』派の文学』昭和二十九年刊）と云っているように、有島の最後（自殺）が、基督崇拜の内村鑑三（一八六一—一九三〇）始め多くの人たちに批難せられたため、一時は、世間から全く見捨てられた恰好であつた。

しかし、私は、彼を、如何に生き、如何に死ぬかという、嚴肅な問題に、苦しみ抜いた明治・大正時代における類少ない文学者のひとりと考えるので、ここに、その精神史のあらましを辿り、かつ、その精神と作品との関係をさぐりながら、作品に描かれた女性像を眺めて見たいと思ふのである。

## 二 その精神史

有島武郎は、明治十一年（一八七八年）、大蔵省書記官有島武の長男として、東京小石川区に生まれた。有島生馬（一八八二—）里見弴（一八八八—）はその実弟である。有島は幼少から、町

建的儒教風の厳格な家庭のしつけと、外人から受けた進歩的キリスト教的洋風の訓育との両面の教育を受けた。そして、彼も亦、他の『白樺』同人たちと同様、学習院出身であり、在学中、当時の皇太子の学友に選ばれるほどの優良な学生でもあった。

その彼が、どうして、東京を離れ、はるばる北海道の、しかも、札幌農学校に行ったか。

以下、主として、彼が森本厚吉と共に、札幌農学校卒業記念として出版した「リビングストーン伝」の第四版の序（一九一九年三月二十二日記）に、彼自らが書いているところによって、その精神史の概要を眺めて見たいと思う。

有島は、北海道行の理由として、そこに、次のように書いている。

1、健康が東京では保たれぬと医師から宣告され、羸弱な自分の肉体をはかなみなから、見渡した地方の学校の中で、殊に私の心を牽き付けたのは、先ず、札幌農学校だった。

2、幼稚な時から、夢のような憧憬を農業に持っていた。（これは、国木田独歩あたりの影響によるかもしれない。）

3、北海道という未開拓で新鮮な自由な風土と、私の少年期の浪漫的な夢想とか結びつき、人前で怯れ勝ちだった私の性情か、こうした、境地の静寂を希わしいものとした。

こうして、北海道に渡った彼は、母と同国で幼い時から、見知っていた因縁によって、札幌農学校の教授、新渡戸博士の家庭に入った。彼は札幌に来て始めて、宗教的空氣の中に浸された気がしたと書いているが、特に、森本厚吉に勧められ、内村鑑三の感化を受けて、

信仰に身を任せて生きようという決心をしたのである。

しかし、この基督教への信仰は、父母の猛烈な反対にあい、「信仰を離せ、森本君と断て。」という手紙を、両親から受けるが、それには従わなかった。そして、清教徒のような清い生活をして、聖書を食とし、祈祷を糧としてすごした。しかも、「怠惰と性慾とは已む時なく、私の刺となつて、私が外面的に清い生活を営む程、私を苦しめ始めた。」と書いている。

かくて、明治三十六年（一九〇三年）有島は渡米したが、その最大の目的は、「私の身辺に絡つてゐた凡ての情実から離れて、本当に自分自身の考へで、自分をまとめることであつた。」と書き、「一人住みの部屋を寄宿舎に与へられたのを幸ひに、私は、自分だけの努力をして、自分を見窮めようと勉めた。」とも叙べている。

次の年に、恐るべき日露戦争が起つた。彼は深く自らの生活を内省し、一年間の思索の最後に、「お前は、本當の信仰上の変身を経験してはゐない。」と断案を下したのである。そして、「生活の多少の変化は、倫理的努力の結果であり、自分以外の超自然的な力によって、支配されてゐると感ずる事は、自惚れにも出来ない。私の持つてゐる善根は、生れた時の儘、悪種の根も、一つとして抜き去られてはゐない。」と内省している。

明治三十六年（一九〇三年）八月に入学したペンシルヴァニアのハアヴァフォード大学院から、マスター・オブ・アーツの学位を授与されて、三十七年六月、そこを出ると、ただちに、もつと、自分を孤独な処に連れ込むため、それから、二カ月間、或る癡癲病院の

看護夫とまでなつた。そこで、

1、私は宇宙の本体なる人格的の神と直接の交歓をした事の絶無なるを知つた。

2、基督教の罪という觀念及びこれに附随する贖罪論か、全然、私の考えと相容れない事を知つた。

3、現世の生活は、未来の階梯という、未来観に疑問をもつた。

4、日露戦争によつて、基督教国民の裏面を見せられた。一体、基督教の血は彼等の何処に流れているのだろう。

と考へて、次第に、彼は基督教信仰から離れて行つたのである。

二カ月後、有島は、ボストンに近い、ハアバード大学の大学院に入ったが、その時、四十恰好の米国人の弁護士と共同生活をする事になつた。彼は、その弁護士から、米國詩人ホイットマン（一八一九—一八九二）の紹介を受け、ホイットマンの説く愛と、あらゆる權威に屈しない強さとを学んだ。また、その弁護士に接してから、善行・悪行の通俗的な見方から解放せられ、人を善人とか悪人とかに片付けて見ないで、人として見るようになったと云つてゐる。即ち、視野を広め、人間の本質を見抜く眼を育てられたということに歸結する。

この頃、唯物的社会主義者金子喜一に出会い、その影響を受けて「私は無力と怯懦の爲に、基督教の眞精神の実行ができない。基督教の信徒たる名簿から、自分の名を除かねばならぬ。」と考へるに至つた。そして、更に、「父の遺産はあるが、自分の仕事で自分だけが食ふような境遇に、身を置かなければ、私は自分自身にすまない。

この時機か何時か来る事を、私は自分自身に約束しておく。その時、私はどれ程すがすがしくなるだらう。」と書いてゐるのも、そうした思想のあらわれであらう。

このあと、有島は筆を續けて、「かうして、今の基督教に対する私の疑惑は段々深まつて行つた。私には悒鬱な日が続いた。」と書いてゐる。有島の在米第二年目は、こんな煩悶懊悩の中に過ぎていったのである。

次の一年、彼は純芸術と基督教との矛盾に悩んだ。そして、「芸術に対する憧憬を圧へてゐるが、まう我慢ができなくなつた。」とも書いている。やがて、文学に入らうと決心し、一種絶望的な気分さえなつて来たが、その秋には、ワシントンの国会付属図書館に通つて、文学書を、順序も系統もなく、興味を便りにあさり讀んだ。それによつて、「自分といふものが、自分に歸つてくるのを感じ出した。」と回顧してゐる。神の信仰の中に見出し得なかつた本當の自分の姿を、文豪の作品の中に見出したのである。とりわけ、「トルストイに眞実な人間性とその生活とを啓示せられ、イブセン・クロポトキンからも糧を与へられたし、讀み返した聖書からも、数限りなき暗示を与へられた。」と述懐してゐる。

明治三十九年（一九〇六年）、聖書か芸術かの悩みは、なお執拗に彼につきまとい、或る種の事件も手伝つて、彼を極度の神経衰弱にした。彼は近郊の百姓家に四カ月を過ごして、漸く元氣をとりもどしたという。

やがて、欧州を廻つて歸國したが、佐古純一郎氏（一九一九

年―)のことは借りれば「信仰に対する懷疑を心にひめて、日本を離れた有島は、今はひとりの背教者として、再び、故国に帰って来た。」(『近代日本文学の悲劇』昭和三十二年刊)のである。

明治四十一年一月、札幌農科大学と名称を変更した母校の一教師となった。

翌四十二年三月、三十一才(数え年三十二才)の有島は、男爵神尾光臣の二女安子を妻に迎えたが、「性慾と信仰との間に始終苦しんだ。」と書いているし、「三十一才になるまで童貞を守り通して来た。」とも書いている。まことに、彼の半生は肉と靈との矛盾の戦であったとも見られる。

四十三年(一九一〇年)、当時救いようもない混迷に陥っていた自然主義や後期浪漫派に対して、人道主義ないし、新理想主義と呼ばれる旗じるしを掲げた『白樺』が発刊せられ、有島も、その同人となつて、愈々文学人としての活動を始めたのである。彼は、そこで、自己の内面をみつめて、矛盾や葛藤に悩む姿を描いて行こうとした。

しかし、大正三年(一九一四年)、彼の愛妻安子は、死病にとりつかれ、越えて、五年の夏、五才、四才、三才の三人の、いたいけな男の子を残し、未だ二十八才の若さで他界した。その上、冬には父さえも病死した。弟生馬宛、八月二日付の有馬の手紙には、「安子からも何事も云わず、僕からも何事も云わず、二人は静に永訣しました。」とあり、又、末弟、行郎宛、十二月六日付の手紙には、「四日朝、七時四十五分父上は安々と眠るが如く他界の人となられた。古へのストイックを思はせるような崇高な立派な最後だった。」とあるが、こ

れらの手紙の裏には、彼の限りなく深い悲しみが流れている。

有島は、例の「リビングストーン伝」序に、「この二つの事変は、私には大転機であり、何時までも、いい加減に自分をごまかしてはゐられないと思つた。私は、思ひ切つて自分を主にする生活に這入るやうになつた。」と書いているが、幼い三児を残しての妻の死、更に、その父の死は、普通人ならば、萎れ果ててしまつてあるところを、彼はその悲しみの中から、猛然と作家活動を続けるに到つたのである。

大正六年(一九一七年)五月、「死と其の前後」、六月「惜みなく愛は奪ふ」、七月「カインの末裔」、八月「クララの出家」「実験室」等。翌七年には、一月「小さき者へ」、三月「死を畏れぬ男」、四月「生れ出づる悩み」等々の諸創作を公表し、この二年間に、第一級作家たるの地歩を確立した。このことについては、有島自身も、大正六年十二月の「新潮」に「嘗てない多作をした年」というようにも叙べている。

有島は、これより約十年前、明治四十一年八月五日の日記に、「女のような同情と憐愍を捨て去れ。汝、無慈悲にならなければいけない。さめざめと泣くものを屠牛者の冷かさを以つて眺めよ。」と書いているが、自分の善良さ、やさしさ故に、いつも沈潜しようとする心を、常に無慈悲にふり払つて、自己を拡大し、自己の可能性のありたけを試みようとする有島であった。私は、この時の彼の作家活動にも、彼の自己拡大の努力を見ることができると思ふのである。

「リビングストーン伝」序の最後は、彼が基督教信仰との訣別を告げた次のことばで結ばれている。

私は私の信仰生活時代の凡ての先輩朋友に対して、私の訣別と感謝の挨拶を謹んで送りたいと思ふ。

これから独りて出懸けます。左様なら。

一九一九年三月二十二日。

これは、大正八年、有島四十二才（数え年）の時に書かれたものである。

その後、有島は次第に自己の社会主義的意識を尖鋭化させ、北海道の農場を小作人達に譲渡したり、自邸を人に譲って借家住いをし、財産放棄の宣言をして、所有の財産を公売に付したりするような懊悩の生活に入った。かくて、次第に抬頭する社会主義的風潮の中で、知識人の果たすべき役割について、真剣に苦悩したのである。

大正十一年（一九二二年）、有島晩年の思想を知る重要な論文となっている「宣言一つ」の中で、彼は「私は第四階級に対しては、無縁の衆生である。今後、私の生活が如何に変わらうとも、私は結局、在来の支配階級の所産であるに相違ないことは、黒人がいくら石鹼で洗ひ立てられても、黒人種たるを失はないのと同様であるだろう。」といい、「自分は結局、ブルジョア階級の一人でしかあり得ない。」という悲観的結論（インテリ敗北論）に達している。恰も、当時のプロレタリア運動内にも、インテリ排撃論があつて、一層、彼を苦悶させたのであつた。

「或る女」の、有名な広告文で、「人生の可能」をいい、それを

信じていた有島は、醜とも邪ともあらわれる、自我拡大の意慾の底にひそむものの終極が、人類の進歩と善に向かうと信じていたが、「宣言一つ」にいたつて、その「人生の可能」に亀裂が生じ、その亀裂が、やがて、大正十二年（一九二三年）六月、彼を人妻との情死行にまでかりたてたのである。

本多秋五氏（一九〇八—）は、「ハムレット」的性格の持主であつた有島は、終生、ドン・キホーテたるべく努力したが、最後の行為ただ一つを除いて、ドン・キホーテたり得なかつた。そこに彼の悲劇がある。「前掲、『白樺』派の文学」というが、有島は、その性格が思索的、懷疑的で、近代化への過渡期であつた当時のわが国において、自己を偽ることができず、ずいぶん自らを苦しめた良心派であつたといえる。

思うに、彼は、普通人が気にもとめないようなことに、一生悩み続けた。青年時代から死に至るまで、信仰に悩み、性に悩み、家の重圧や社会の因襲に悩んだが、後年は、第四階級と相容れがたいことを思想的に悩んでいる。そして、彼の最後は、比較的公平なと思われる多くの評論家がいふように、時代の思潮に抗しきれなくなつた近代人の深刻な苦悩の結果であつたとすれば、われわれは、これに対して、一掬の涙なきを得ぬのである。

### 三 「或る女」（大正八年刊）

有島の精神遍歴の概要を出つた私は、以下、彼に描かれた女性像を眺めて見たいと思う。

有島の作品における女性をいう場合、常にあげられるのは、「或る女」(前編は「或る女のグリンプス」の題で、雑誌『白樺』に明治四十四年二月から大正二年二月まで連載された。)の葉子である。

早月葉子は、日本橋の開業医を父とし、キリスト教婦人同盟の名流婦人を母とし、厳格な家庭に育った。ミッシェン女学校で新教育を受け、詩人木部孤節と恋愛に陥り、親の反対を押し切つて、自由結婚をしたが、同棲二カ月、木部の肉体・性格に不満を抱き、姿をかくしてしまったことになっている。男性の卑劣さ横暴さにあいそづかしをしたというのであろう。これは、有名な独歩とその愛人、佐々城信子との事件にヒントを得たものと評されている。

かくて、彼女は、新しい婚約者木村を尋ねてアメリカに渡るが、絵島丸の事務長倉地三吉の巨大な肉体美に心ひかれ、シャトルに着いても、上陸もせず、直ちに帰国してしまふ。彼女と倉地との関係は新聞に報道せられ、周囲からも白眼視せられたが、葉子はそれに頓着しない。妻子を捨てた倉地との同棲生活は、一時は、愛の陶醉であつたが、倉地はその問題で職を失い、衣食のために遂にスパイになる。それが発覚して、倉地は失踪し、葉子は病氣の手術をしたが、経過が悪く、苦痛に呻きながら、思い乱れつつ、死んで行くという筋である。

この作品は、前に触れたように、モデルがあるといふので有名であるが、有島は「『或る女』(後編)書後」(一九一九年五月十一日記)に、そのことについて次のように書いている。

この小説には、モデルがあつて、それは、或る文学者とその

先妻にあたる人とが用ゐられてゐると云ふ或る一部の人達の評判は、それに違ひありません。然し、それは、事件の極く輪郭だけからヒントを得たので、性格などは全然私が創作したものです。殊に後半の女主人公やそれと事務長との関係は、全然無根だと云つていいのです。だから、この作品は全く私の実感の延長だとして読んでいただきます。モデルに累を及ぼしたくないから一言します。

さて、葉子の行動は、多くの人が指摘するように、「カインの末裔」の広岡仁右衛門そのままであり、彼女は本能の衝動的行為に終始している。それは、一種のニヒリズムであり、大胆奔放に、自らの欲する方向へ驀進するのである。

思うに、彼女は、明治末期から大正にかけてあらわれた新しい女のひとりであり、才気ばしつた美貌と媚態を備えていて、あらゆる男性を強くひきつけたのであるが、その最後は、まことに悲惨そのものであつた。

この小説の根底にある思想として、有島が大正八年(一九一九年)十月十九日、石坂養平氏(一八八五—)にあてた手紙を見ると、

何物をも男性から奪はれた女性は、男性に対して、その存在を認めらるる為めに、女性の唯一の宝なる貞操を売らねばなりませんでした。然し、この不自然な妥協は、如何にして女性の本能の中に、男性に対する憎悪を醸さないでゐられましょう。

男女の闘争はここから生れ出ます。同時に、女性はまた、女性本来の本能を捨てる事が出来ません。即ち男子に対する愛着で

す。この二つの矛盾した本能が上になり下になり相剋してゐるのが、今の女性の悲しい運命です。私はそれを見ると心が痛みます。「或る女」はかくして生れたのです。

とある。有島の深い愛情か、生を享けた人間の苦しみを、一般の人に訴えるべく、この小説を書かせたのであると思われる。すなわち、女性なれば女性がもつと解放せられ、自由に自己を主張し、堂々と生きてゆける時代が来ねば、この不幸はいつまでも続くことを世間に警告したものである。結局、作者は、葉子を「生るべきでない時代に、生るべきでない処に生れて来た」女性としており、明治末期、自我に目ざめて、自我の真実に生きようと志し、古い束縛や道徳に反抗した勝気で聰明なある女が、自分自身でも、どう生きてよいかわらず、社会も進んでいないため、徒らに運命に生きることを余儀なくされたその悲劇を、克明に描いているのである。

それは、くりかえしていえば、近代日本女性の自我発達史における、一つの高揚期に、典型的な一つのタイプを創造したものであるということもできる。

有島自身としては、これを刊行する時、自分で書いた有名な広告文に、

畏れることなく、醜にも邪にもぶつかって見よう。その底には何かがあるか。若しその底に何もなかったら、人生の可能は否定されなければならない。私は無力ながら敢へてこの冒険を企てた。

と述べて、この長編の意図と、この長編に対する自らの意気込みと

をいい、この作品によって「人生の可能」を試そうとした。すなわち、彼は、ここで、人間の獸性を飽くまでも追求しようとしたのである。有島は、社会の複雑なしくみが人間の性格をゆがめ、心情を伸ばし切らぬことに悩み、自分が属している上流階級の因襲や礼儀や生活様式を極度に嫌っていたし、自分の実生活における「紳士」の粹を虚偽・偽善の生活として不満足に思い、これを排斥して、下層の人々の野性的な生活に心ひかれていた。

しかも、日常生活では、これを打ち破ることができぬので、小説的フィクションの中で、これを打ち破り、彼の中なる混沌としたままの猛烈なエネルギーを、じゆうぶん解放しようとしたのである。

それは、やかつて、論文「惜みなく愛は奪ふ」（大正九年作）の中でいっている「本能的な生活」を讚美し、世間の因襲打破をいう精神そのものでもあった。

なお、作者は葉子をして病院の片隅で、「間違つてゐた。かう世の中を歩いて来るんぢやなかった。」と叫ばしめたが、その不幸の原因については、特に深く触れてはおらず、そのことは続いて、葉子に「それは誰の罪だ。分らない。」と云わせている。それは、暗に、これか一つの社会問題であることを、におわせた結果に他ならない。

しかも、悲惨な末路に追い込まれた葉子の最後を見ると、有島は、葉子が結婚に失敗した時、或は倉地との關係が新聞に出た時などに、反省と思索をすれば、彼女も亦靈性にめざめ、新しい生命を得ることができたであろうことを暗示しているようにも思われる。そ

して、このことは、有島が米國留學中、同居の弁護士から示唆を受けたという、人間の行動は善とか悪とか一方的に片付けられないものをもっていることばを、思い起こさせるものである。

葉子の不幸の原因については、このように、靈性のめざめの不足とか、社会的問題とかを考える考え方があるが、宮本百合子（一八九九—一九五一）は、このことにつき、『或る女』についてのノート（昭和十一年十月「文芸」所載）の中で、

葉子は自分の生活を間違つてゐただけ云つてゐるが、葉子とともに、作者もそこで止まつてしまつてゐるやうに見える。しんではきはめて物質的な葉子が、女の幸福、この世における女の喜び・誇りの全部をかけて、たまたま男とのいきさつの間にだけ、その解決を求めてゐたことに対して、それが葉子のみならず、現実に女の不幸の最大の原因であることを、作者は、明確に觀察して描き出してゐない。経済的なよりどころとして、葉子の生活においては、次から次へと男が必要であつた。そして、葉子自身は一度も、自主的になんとか経済的な面を打調しようと思つても見なかつた。

という批判をしている。

これについては、小田切秀雄氏（一九一六—）も、「近代日本文学の思想と状況」（昭和四十年二月刊）の中でいうように、「或る女」の後半の書かれた大正八年（一九一九年）には、作者はすでに、労働運動、社会主義運動の波の高揚を眼前にしており、その前には、武者小路の「新しき村」の運動（大正七年）があつて、有島

自身も、自我と社会との關係について、思いをひそめはじめたのだから、それより、五年前に書いた前半の出来がわるくて、後半への規制力が弱ければ、後半を書く際、「自主的になんとか経済的な面を打開しようと思つて」みるくらい、葉子にさせることが可能であつたかもしれないが、前半で既に作品の根本は、しっかりと組み立てられていたために、大はばな修正を加えても、このような女主人公に、経済的自立を考えさせるようなことは、遂に不可能であると思われたのである。

ある評論家が娼婦型と呼んだ葉子ほど、性格が激しく、はっきりとはしていないけれど、葉子の外にも、有島が描いた娼婦型の女性としては、「石にひしがれた雑草」のM子などがある。

M子も思想的には、ニヒリズムであり、一生媚態と淫樂に生きようとする傾向が強かつた。そして、夫があるのに、夫の友人加藤に走り、貞操觀念が全くなく、物質的享樂的で虚偽と小策を弄してやましいとは思わず、夫の眼をかすめて、情夫や美少年と戯れているが、やがて、心身を蝕まれ容貌も衰えてしまう。かくて、情夫のもとへ追いやられた最後の姿はみじめであつた。美貌と才氣を恃んで、人生行路に省慮のない女の帰着点は、大抵M子にひとしいのか。有島はM子を自らの手で葬らせて、葉子の場合同様、読む者の胸に、しみじみとした哀感を催させるのである。

#### 四 「星座」など

葉子やM子に対して、「星座」のおぬいさん、「クララの出家」の



クララ、「宣言」のY子などの清純な女性は、有島の実想・主張と一致したタイプの女性であり、いずれも、有島、理想の女性の投影と見ることができよう。以下、それらの概要を眺めて見る。

「宣言」(大正四年作)

武者小路の「友情」(大正八年作)は、この小説に酷似している。ある女性(Y子)に熱烈な思慕を抱くAは、Bに、その女性を紹介せられ、婚約までするに到ったか、やがて、Aの家は破産し、仙台に帰って製粉工場を経営しながら、母と妹とを養っている。一方、Y子は東京にあって病患にかかる。Bは、Aからもいわれて、Y子の家と同居する。その後、AとBとの間に度々手紙の往復があり、この書簡体の小説も終りに近いところで、Y子は手記を持って突然仙台に行く。涙ながらに、Aの前に差し出したY子の長い長い手記には、

ある時——それは雨の降る日で御座いました——B様がしみじみ私にいろいろなお話をなさった事か御座いました。B様は固よりお気付きにはならなかつたので御座います、その時、私は突然B様を恋するやうになつたので御座います——許して下さいませ。

ということばかり、終りに近く、私のいつはらざる性格は、貴方を尊敬し、B様を恋させます。と、はつきりその中に書いてあった。

病の重り行く母と、Bに失恋した妹とを抱えたAは、遂に、Y子を失う。しかも、AかBに送る最後の手紙は、

心よ。忍んで待て。

黎明の空の端に、二月二十三日の太陽が今昇り始めた。

僕はそれを見つめている。

と結ばれて、この小説は終っている。果てしない悲しみの中からも、黎明の光を望むところ、如何にも『白樺』派らしいが、ともかく、これが、「宣言」の大体の筋である。

振り返って、ここに描かれた女性Y子を見ると、A、B、二人の男性の蔭の女性であつて、「或る女」の葉子のように、正面からは描かれていない。いかにも悲しい運命の下に生まれ、あまりよくない養母と旅行ばかりしている養父と、一克者のそのお爺さんとの家に育つたY子の、子供の頃からの、やさしく美しい姿を、作者は、Aを通して、ある時はBの筆をかりて、描いている。

Y子の面から、この小説の大意をいえば、美しいひとりの女性が、Aに思われ、自分もその気になつていたが、終に、Aに詫びBに行くということである。

Aが、それ相当の理由はあつたが、婚約の女性と長く離れていたこと、親友を婚約の女性と同居させていたことなど、悲劇にならねばならぬ要因はいろいろあると考えられる。しかも、前にもいうように、出生から始まって、運命の子という外はないY子は、やさしく、美しく、心身の清らかさを守りつづけてはおり、理知的というよりも、情念豊かな女性というべきである。

「クララの出家」(大正六年作)

有島は、

これも正しく人間生活史の中に起つた實際の出来事の一つである。(圈点、筆者)

と書いて、この短篇小説を始め、しかも、これは、「千二百十二年」のこととしていたので、有島自身も、この話を、現代からは、おおよそ、縁遠いものと見ていたことがわかる。

クララは、当時の風潮が、榮華を求め、享樂を追うのに嫌らず、乞食僧といわれたアツシジのフランシスを景仰し、十六才にして、「全く肉の世界から逃れ出る事が出来た。それから一年半の長い長い天との婚約の試練も今夜で果てた。」「是れからは、一人の主にも心も敵げ得る嬉しい境涯」が、彼女を待っていたのである。

こうして、クララは夜半、家を出、炬火を持った四人の教友が待ち受けているポルチウクウラの礼拝所の遙かな坂上に立つて、「瀕死者がこの世に最後の執着を感じるやうに、きびしく烈しく、父母や妹を思った。」のであった。

千年後の今日もないとはいえぬが、この荒筋は、人間生活史においては、稀有のことであるといわねばならず、如何に生きるべきかの私たちの探求には、やや現実放れのしたものを感じさせる。しかし、浮世の塵にまみれかちな私たちに、こういう話が、一服の清涼剤となることは、間違いない。

なお、織田正信氏(一九〇三—一九四五)は、

原始の儘の人間相から、肉を棄てて、靈に生きる人間相に至る迄、「カインの末裔」(大正六年七月)から「クララの出家」(大正六年八月)へと、有島の探求する世界は広くそして深い。有

島は、「自分を主とする生活」建設のために、人間生活史に現れた諸様相に、ひたむきな批判の眼を向け、そこから、何も何かを把握しようとした。

と書いているが、前にも見て来たように、この作の生まれた大正六年(一九一七年)は、有島にとって大転機の年であり、思想のひたむきな模索もしていたことが、ここからも眺められるのである。

「星座」(大正十一年作)

有島の札幌農学校時代に取材し、藤村の「春」と比較される未完の長篇小説である。この「星座」は、星野・渡辺・西山をめぐって、柿江・人見・森村・石岡らの学生や寮の婆や市民たちなど、二十人近い人物が交錯するが、それら一群の星の中で、もっとも清らかに光るのは、学生たちから、「おぬいさん」と親しみ呼ばれる三隅ぬいである。

坂本浩氏(一九〇七— )は、有島に描かれたこの「おぬいさん」について、

彼女は平和や純潔そのもののやうに輝く美しい目の持主です。

「神々しいinnocence」をもって光るエンジェルです。彼女は

「真から悪い人といふ人が世の中には、本当にあるものだらうか。」と考へてゐます。また若い学生からその年齢を聞かれて、

「素直に十九だと答へ」てゐます。自らは意識してゐないので、すが、みづみづしい魅力に満ちてゐるのです。

と書いている。

有島は、前述のクララ、Y子を始め、彼の理想的女性の一面をい

ろいろと描いているが、「星座」の「おぬいさん」は、その中で、もつとも完全に近く、清純で控え目なうちに、しつかりした気質をもった女性として描かれている。

振り返って見るに、有島は、清純な女性を描く場合にも、娼婦型の女性を描く場合にも、いつも、「芸術は愛なり」という彼の根本精神から出発しているが、伝統や因襲をきらって、真実の自己に生きようとする精神は、清純型よりも、むしろ、娼婦型を描く場合に、豊潤絢爛の文章をなしているように思われる。

しかも、いずれの場合にも、読後、私たちの胸には、芸術的香気の奥深く、愛の正しい認識と、ヒューマニスタックな零囲気とか、しみじみと感じさせられるのである。

## 五 結 び

有島の、「文学は如何に味ふべきか。」(大正八年(一九一九年)十一月)の中に、次のような話がある。

北海道から来た人が、確かな話として告げたところによると、二十四・五才の北海道の女の人が、許婚のある身で、偶々行つたある漁村の眉目秀麗な男らしい青年漁夫と恋に落ちた。そして、その女の人は、私の書いた「生れ出づる悩み」を読んで、自分の境遇と酷似してゐるので、大いに動かされ、二人の間は益々深くなつて行つた。次で「石にひしがれた雑草」を読んだか、その小説では、外国遊学の夫の留守中に夫の友人と関係し、大か蒲湖して後、それを知って、如何にも残酷な方法で妻を責

めるので、自分も非常に煩悶した。その後、「或る女」を読んだで、愈々ヒステリーになつてしまつた。が、その女の人は、もう一度、次に出る有島の小説を待つて、自分の決心を固めると云つてゐるといふことであつた。

そして、有島は、

私は、小説が、一人の人の生活に、如何に影響してゐるかといふことを知つた。

と云つている。

このあと、有島は、文学の真の味い方につき、縷々述べているが、現代に、より直面していると思うので、私は、ここに、伊藤整氏(一九〇五—)のことばを借りて、正しいと思われる小説の読み方を考えて見る。

伊藤氏は、「典子の生きかた」(昭和十五年刊)の「あとがき」(昭和三十年二月第二版につけた。)に次のようにべている。

小説が、娯楽か生活指針かという問題は一般読者には大きな問題であらう。しかし、作者の方から言ふと、そのどちらも本当の読み方とは言はれない。かういふ性格の、かういふ立場の人物は、かういふ生き方をする、かういふ風に生を味ふといふことから、間接に自分の生活の意味を発見することが望ましい。作中人物の引き写しの生活は、存在し得ない。人は一人つつ違ふ。その生の味もまた一つづつ違ふ。だが読者は、その類型を自分の中に発見するだらう。そして、作品と自分を同時に客観視できれば、それが最もいいだらう。

「この人物がかう生きてから私も。」といふ読み方は、よい読み方とは言はれない。人はかういふ場合に、かうなりがちなものである。そして、生活の中に働いてゐて、我々を動かす力は、かういふものである、といふことを、生きることのリズムとして味ふこと。そういふ風に読まれることが望ましい。

私は、全くこれに同感である。

現実生活における、清純な或は奔放多情な女性を描いた有島の小説を読む際にも、私たちは、作者がそういう形象化をするに至った精神構造の如何を尋ねながら、作者のとらえたテーマ或はその作の精神をこそ読みとるべきであると思ふものである。

(昭和四〇、一一、一記)